

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十三年六月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十八巻第二号（通巻第二〇六号）

鈴



柳澤宗正

ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第 206号

6. 2011

脱  
輪

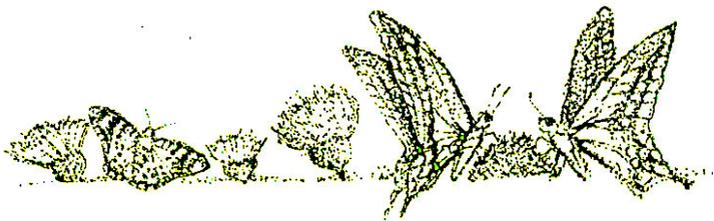
品川 鈴子

後家の身となりにし折も菜種梅雨

雨もよひ八重の花房爪で摘む

庭下駄で手箒の父花翳に

締切の稿想湧かず春寒し



遊び声絶えし町内子供の日  
学園に迷ひてしとど青時雨  
梅雨入り学園キャンパスに脱輪して遅刻  
駅と学園ピストン運行梅雨入りバス  
築島の茶室の縁に梅雨の傘  
殿の田を番の蜻蛉見て廻る



# 玉鈴

# 吟

大阪 竹下 昭子

春埃未完の遺作「吉祥天」  
刀鍛冶鞆にまじる春の風  
刀匠の春の鞆に鈍の音  
末裔の案内に余寒武者走り  
ことさらに余寒厳しき武者隠し

大阪 武田ともこ

自転車のブレーキ音に春きざす  
春の風子らは古墳でかくれんぼ  
恋猫でありし日もあり爪を研ぐ  
図書館もIT化して二月尽  
点々と露の臺生る墓地の径

愛媛 武智 恭子

早朝に小鳥蜜吸ふ花散らし  
待ちあぐむ白椿咲き吾笑顔  
寒風が畑のテント薙ぎ倒す  
見舞受く石焼芋の甘き味  
垂れ梅咲きたる庭を見上ぐ人

大阪 谷 泰子

雛とするままごと遊び一人つ子  
梅綻ぶ家の売却本決まり  
肋骨に痛みが走る猫の恋  
性懲りもなく又来たる恋の猫  
戻り寒敢へて背筋を伸ばしたる

兵庫 恒成久美子

駐車場満杯となる梅の園  
名も色もそれぞれ美し梅の園  
玄関の雛段めでて句の席へ  
老いてなほ雛飾るとき若やぎぬ  
春潮が津波と化して人攫ふ

大阪 角谷美恵子

余震の山河円やかに春の月  
公園の崖より伸びる初桜  
圧力鍋蒸らす間浅蜩音こぼし  
名を呼べど犬は籠りし春ごたつ  
母へ追伸鮎子が柔く炊け

愛媛 年森 恭子

凍土の町丸呑みに大津波  
遠景に見ゆ春耕が伸ばす腰  
苗札を挿して無言のおもてなし  
雛飾る四半世紀を欠かさずに  
字を書けるごと春眠を偽装せり

兵庫 内藤 三男

露の臺やうやく大地ほどけたる  
エレベーター独りの寒さ乗せて来し  
八十八二年となりし日向ぼこ  
菜の花を咲かせて重し淡路島  
耕して匂ふ大地となりにけり

兵庫 中尾 廣美

後手に庭のすみずみ春探る  
つくしんぼ添えられ届く菓子の折  
フランス 仏 神父身を振り真似る杉落葉  
門のかたりと鳴りて冴え返る  
介護士のスニーカーにつく春の泥

兵庫 中島 節子

一瞬に消える日常雪の果  
住居表示意味失へり土凍てて  
会見は部外者の如余寒なほ  
やうやくに届く炊出し湯氣立てて  
街頭の募金呼びかけマスク付け

大阪 中島 霞

釘付けの地震の映像余寒大  
すさまじき速さに津波街破壊  
崩壊の街に呆然涙涸れ  
春寒しこの世の地獄まざと見て  
被災地を偲ぶ暖房全て消し

大阪 中田 寿子

雛飾る転勤中の子に替り  
動物は飼えぬマンシオン猫の恋  
木の芽張るむずむずとして嬰の齒も  
春キャベツゆるく生きるも処世術  
津波跡隠しきれずに春の雪

大阪 野口喜久子

落椿まだ聞き耳を立ててをり  
初恋はこんな味よと露の臺  
凍解の土に古代の謎を掘る  
体重の過不足なくて青き踏む  
還らざる北方領土誓子の忌

兵庫 蓮尾みどり

合併に字あきの消えたる梅の里  
ひらがなでこねこさがしてますのびら  
風をよみ風をつかんだ奴風  
孫は就活吾は終活螻の道  
涅槃の変原発神話が崩潰す

兵庫 長谷川 鮎

高札を読む間も傘へ楠の花  
先々と心を読まれ虞美人草  
天竺が真中の古地囃風青し  
青葉蔭白洲次郎と正子墓碑  
水中花九鬼の旧宅下段の間

兵庫 林 哲夫

春休み講堂突貫工事中  
卒業式空席の子はもう来ない  
靴擦れを庇ひて遠し梅見茶屋  
退職す新社員にも会釈して  
梅林を横目に急ぐ甲子園

兵庫 林 美智

都井岬栗毛の仔馬跳ねてとぶ  
庭の樹に姿知らねど百千鳥  
地震の跡遅々たるままに春いまだ  
春北風地震の爪跡つぎつぎに  
春の夢根刮ぎ濡ふ大津波

兵庫 福島 松子

春の波自分探しという旅に  
まんざくやいつもおんなじ一言目  
長き藁搔き分け出入り小花蜂  
河原鶉植物園の網越しに  
枝垂れ梅順番待ちのカメラマン

愛媛 福田かよ子

つけ睫毛目力ありて春立ちぬ  
春の雪ばさりばさりと杉木立  
花の蜜子猿吸ひをり見張る親  
白梅の廃屋にある箸茶碗  
梅花散る土塀に陶片塗り込まれ

愛媛 藤井久仁子

花嫁に父はなくとも桃の花  
近江路に癒えし足取り草萌ゆる  
余寒など吹つ飛ぶ露天の女風呂  
春の風道ゆづらるる介護杖  
梅開き端切れ細工の作品展

兵庫 藤田かもめ

媛塚にほのと匂へる梅の花  
遠き日の子をとろ子とろ春のくれ  
剥落の十二神将春埃  
荷駄軽き驢馬の大耳陽炎へる  
帰る雁難無く子午線越えゆけり

兵庫 藤田 京子

春日射あまねく地震の地にそぞげ  
釣銭と共に渡さる紙ひいな  
食膳の白魚談義で盛り上る  
伝説のねずみ黒々涅槃絵図  
米寿祝鉄斎の軸三月尽

# 鈴の奏

品川鈴子選

初写真父の小指を握る嬰 香川 田中真由美

春眠の体内時計作動せず

初桜バス待つ時も華やげり

燕の巣徒歩で買物できる街

啓蟄に初めて土を踏む子犬 兵庫 坊野貴代美

受験終へテニス練習球光る

春障子猫の尻尾の影通る

雪解水吊り橋渡るハミングで

恋の猫車擦り擦り煤だらけ 香川 石川 裕美

日永し仕事帰りのティータイム

雛あられ各色満遍なく食す

泥つけてパンダさながら雪だるま

靴下げて御影を拝す法然忌 兵庫 岩木 眞澄

しだれ梅道行く人の足を止め

しだれ梅道行く人の足を止め

結納に梅香も包み紋風呂敷

兄嫁の短き文といかなごと 埼玉 松岡 水学

鹿尾菜煮る大震災を免れて ひじき

被災地の人々に来よつばくらめ

誓子忌や海なき国に仮寝して

背振山越ゆれば唐津遠霞 福岡 山口 博通

踏み鳴らす弁慶春の能楽堂

満を持す辛夷の蕾並木道

市となりし過疎の故郷春の川

避難所にコーラス和して春を呼ぶ 兵庫 市橋 香

着のみのままに避難の卒業式

被災地へやつと届くや春キャベツ

雪しまく大津波あと胸緊むる

春の陽に元チャペルなる文学館 兵庫 四葉 允子

誓子句集「黄旗」装丁に春めきぬ

タイヤに座し笹食むパンダ春日和

遠足の児等纏いつく若き保父

大橋に点る灯りや月朧 兵庫 有本 勝

到着の電車待つ間の余寒かな

道真の座りし綱や梅の花

寒燈を振つてベル押す発車かな

燈火に盆梅の精夜の能

齡百・二百の盛り盆梅展

薄氷に狂はされたる老の足

雛菓子忘れぬ妻の五十年

残り鴨着水しては心地よげ

残り鴨水かきひろげまた着水

残り鴨群追ふ目もとうつろなる

雨の夜は香馥郁枝垂れ梅

かるがると旅立つ娘雁帰る

涅槃西風誓子遺愛の太き筆

春の雪高速艇のすべり出す

前掛に鮎子つけて解禁日

お互に物忘れ増え木々芽吹く

鹿児島の記事に包まれ笥來

朝陽照る庭に乾したき厚布団

唐子椿満開となり師を想う

明けくるるりハビリ完了凍てゆるむ

手を合わせ雨水生れ円吾が命

蝶みたよ駆けて伝言幼顔

兵庫

改正 節夫

大阪

河村 武信

兵庫

高木 篤子

兵庫

水上 貞子

神奈川

八木 紀子

あたたかや草木も人も輝けり

姉妹曳く犬に着せ替へ赤セーター

辛夷の芽千の燭台掲げたる

かるた取り恍惚の母優勝す

海峽に大橋溶けさう冬の日矢

雛拜見大き沓脱石上がり

長廊下いくつも曲がり雛の間

雛の前無手勝流に頂く茶

江戸ひいな眉根清らに十五人

逆上りの児春風を連れてゐし

春の海悪魔の牙を頭にす

涙眼で黙禱地震の春寒し

梅の園一目千本香りくる

春大根主役に据ゑる料理店

囀りや街に増えゆく外国語

啓蟄や上りのエスカレーター混む

願掛けもお礼参りも梅まつり

大地震に外へとび出し寒き春

春浅し地震速報箸持てず

大津波悲しき春の濡れ鴉

春雨も号泣となり夜は更ける

兵庫

増本 明子

東京

遠藤とも子

木野 裕美

堤 節子

樋口 正輝

# 秀 鈴 記

燕の巣徒歩で買物できる街

田中真由美

家からは散歩がてらの道のりに、さっぱりとしてごごんまり纏まって商いを続けている商店街があり、顔なじみとなって気楽に買物ができる。アーケードを飛び交う燕も親しい中都市が主婦にとつては快適な居住地。スーパーなどが大型化して商品があふれていても、だんだん郊外へと移る傾向で、いちいち車を出すのは、小買物や買い忘れなどにはかえって不便。

啓蟄に初めて土を踏む子犬

坊野貴代美

太陽暦の三月六日ころは、冬籠りの虫が這い出る。産まれたての子犬もその頃までは、家の中で大事に育てられてきたが、暖かくなったら外に出たがり元気に走り回る。足の柔らかい肉丘は、いままで触れた事の無い土の感触に戸惑いながらも、今後の長い生涯を楽しむ大地にすっかり足を踏ん張る。

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 武田 ともこ //

\*選句は全て 品川鈴子

恋の猫車擦り擦り煤だらけ

石川 裕美

動物は恋の時季になるとおおむねお洒落な彩となる。だが恋に一度の猫はまっしぐらに相手をもとめて車の下へもぐって排気管を擦りながら走って行く。人間なら鏡で化粧などするところを、煤まみれの吾が姿を眺められないのも救いだろうか。

結納に梅香も包み紋風呂敷

岩木 眞澄

事実婚や同居ぐらしがめずらしくなくなった昨今、古くからの慣例に則った婚礼の儀式が清々しく感ぜられる。古式豊かな結納品を紋風呂敷に万感の親心と馥郁たる梅の香を包み込む。佳き日の情景と親御さんの心情がしのばれる。

鹿尾菜煮る大震災を免れて

松岡 水学

句からはどのように、何時、大震災を免れたのかは不明

だが、今回の災害は大という接頭語では言い表せない残酷な自然の仕業である。鹿尾菜を浜に干してある風景や、油揚げと煮付ける厨など、平穏な日常生活と震災との対比がこころを打つ。

市となりし過疎の故郷春の川

山口 博通

〇〇村大字〇〇小字〇〇は懐かしい響きと文字の並びである。家並みや川の流れは昔と少しも変わらないのに、地名は〇〇市になっている。近所の家で無人になっている処もある。なつかしい故郷ではある。

着のみ着のままに避難の卒業式

市橋 香

津波の避難は文字通り着のみ着のままである。「てんでんこ」てんでばらばらに避難せよという言い伝えがあるそうだ。着のみ着のままでも卒業式はできる。卒業式、入学式、若者たちよ、前へ進め！

タイヤに座し笹食むパンダ春日和

四葉 允子

これが自然界に本当に存在するのだろうかと思うほどパンダは愛らしい。見ているだけで頬が緩んでくる。笹が好物なんだってねえ。そんなに美味しいのかい。

日本中が重苦しい時に君がはるばる来てくれてほんとによかったよ。

道真の座りし綱や梅の花

有本 勝

道真は日本人にとって大変親しみやすい人物らしい。学問、梅は言うに及ばず、牛や綱もゆかりの故事来歴があり信仰の対象になっている。綱で座を作って差し上げたことから各地に綱敷天神社がある。この句は須磨の社で詠まれたのであろうか。

雛菓子忘れぬ妻の五十年

改正 節夫

一口に五十年というが半世紀である。雛を飾る時のころのあり処は五十年それぞれに違っていたであろう。よくもまあここまでやってきたものだ。雛菓子を忘れずに整える妻へのいたわりがしみじみと感じられる。(以下略)